

本多静六通信

第11号

発行
本多静六博士
を記念する会

本多静六と清澄演習林 — 演習林創設の頃 —

お茶の水女子大学名誉教授
聖学院大学教授 遠山 益

(一)

清澄きよすみという地名を耳にしてから、半世紀の間、行ったことがなかった。植物学を専攻する学生にとっては、一度は行っておくべき場所であったが、私はこの分野で身を立ようとは全く考えていなかったから、いつも機会を逃していた。

植物分類学の教授は、日曜日を利用して、学生を植物採集に連れて行くのが習わしで、清澄もまたしばしば採集場所になっていた。私は植物の分類には無関心であった。

内房、外房の鉄道が開通していない明治の頃、清澄に来るには、東京湾を船で渡って、対岸の内房に上陸し、そこから徒歩で途中一泊して、翌日の夕刻に清澄に到着した。今では急行列車を利用すれば二時間でやって来れる。

外房線の御宿を過ぎる頃から、南房総の風景は、関東地方の内陸部と比べると、大分異なつて南国のようである。温暖な海岸性の気候は、人々の肌でも視覚でも感じとれる。多くの植物たちもこの気候に正直に反応してくれる。

南房総の明るさは、海面に反射した陽光によるところが多いが、海岸植物の葉面で反射した光りにもよる。海岸に面した山地には、天然性のタブ、スタジイ、マテバシイなどの照葉樹林がよく発達している。真鶴半島や伊豆半島の南端部と比べても、南房総の照葉樹林ははるかに見事である。

南房総は暖帯性植物の北限であると同時に、温帯性植物の南限であつて、両者が重複している。このため植物相は非常に豊富である。植物の分類生態に従事する人々にとっては、南房総

は貴重な魅力的な場所である。学生時代から数えて、五十年も経つた平成十年の暮に、私は思い立って清澄を訪ねた。それは、本多静六の主な仕事をまとめてみようと考えたからである。多数の文献を読んでいるうちに、清澄に関する多くの雑学を得ることができた。

(二)

暮の二十九日、安房あわま天津は快晴で、風もなく、穏やかな日和であつた。列車から降りた客は、私ども夫婦のほかには、地元の人らしい婦人一人だけであつた。都心では想像もできないひっそりした田舎の駅である。

清澄行きのバスは一日数本しかない。タクシーの運転手は車内で寝ていたが、数少ない私ども乗客をのせて、機嫌よく、見事に舗装された道路を清澄山まで登つた。

清澄寺は日蓮宗の名刹めいさつの一つである。それにふさわしく、境内にはスギの巨木、通称「千年

目次

○本多静六と清澄演習林(遠山 益)……1	
○本多博士の奨学金と 貴い教訓の数々(横川登代司)……6	
○垣間見る偉人(小山千秋)……9	
○日本の公園の父・本多静六博士 — 愛知・岐阜県下の事例 — (渋谷克美)……10	
○埼玉学生誘掖会と本多博士……15	



清澄山頂附近にある名刹「清澄寺」、右手の大木が「千年杉」

スギ」がある。千年をこえる清澄寺の歴史から考えても、国の天然記念物に指定される古木といえる。現在も樹勢は良好であるように見受けられた。

千年スギのすぐ奥手の山頂に、日蓮の立像が天津の海を見下ろして建っている。日蓮はこの山頂からすぐ下に見える安房小湊の生まれであ

る。小湊にも名刹誕生寺がある。

日蓮は幼い頃清澄寺に入って僧侶となり、諸国行脚の修行を積んで、再び清澄に帰ってきた。建長五年（一一五三）四月二十八日の朝、日蓮は清澄山頂旭ヶ森に立って、天津の海から昇る朝日を拝みながら、はじめて「南無妙法蓮華經」のお題目を唱えたという。これが日蓮宗の開宗とされている。

本多が初めて清澄に足を踏み入れた頃、ここから天津を見下ろした眺めは、一面のススキやカヤの原野であったと思われる。それ以来百余年、今旭ヶ森から見下ろす風景は、海岸まで幾重にも山が連なり、その山々のどれもが、見事に成長した人工林でおおわれている。歴代の教官、学生、作業員たちが手塩に掛けて育てたであろうご苦労のあとが偲ばれる。

私どもは清澄寺の左側から、一杯水林道に入って行った。海拔はせいぜい三百メートル前後であるのに、地形は複雑で、起伏に富み、かなり急峻で、深い谷が多いのに驚く。さらに、急斜面の谷底近くまで、植林されたスギやヒノキが見事な美林を形成しているのを見張る。

三十年近くも経ったであろう成木がよく枝打ちされ、間伐もされた樹林は、まるで日本画でも見るような、静寂な美しさをたたえていた。

林道を麻綿原まめんばらに向かって歩く。途中の各要所には案内図や演習林施業の説明板などがあって、格好の自然観察路でもある。初夏の頃には、静かな散策路となるばかりでなく、森林浴にも最

適のコースであろう。

私どもは人っ子ひとり通らない、物音ひとつ聞こえない林道を歩きながら、心わくばかり空気を吸い、美林を見回し太い幹を撫でたりしながら、演習林のバイオニアたちのご苦労に思いを馳せた。一杯水林道沿いには、桜ヶ尾老齡スギ林、梨ノ木台スギ間伐及び間伐材搬出試験林、飛越スギ、ヒノキ単植え試験林など、いずれも四十年前後を経たスギ、ヒノキの美林を観察できる。

清澄の大学演習林は二千二百ヘクタールの広さである。今回はそのうち一杯水林道を歩いたにすぎない。次回には、浅間山原生林や内外の樹木見本林なども見たいと思う。

万事インスタントの現世にあって、三十年、五十年後の成果を見つめて、樹木に愛情を注ぐ人々に敬意を表したい。どの植物も手をかけてやれば、すくすくと素直に成長してくれる。育林にあたる人々の自然愛の心根が思い知らされる。

(三)

本多静六は日本における大学演習林の創設にあたって、主役的な功績を残した。これには、農商務省、文部省などの役人たち、大学の上司たちの協力と援助があったことは当然である。演習林の実現に直接力を貸した幾人かについて触れてみる。

志賀泰山は当時帝国大学農科大学の林学教授



①千葉演習林が誕生するきっかけとなった浅間山（中央のこんもりとした山）
②清澄山から千葉演習林越しに大平洋をのぞむ（中央の町並みは天津）



であった。彼は幼くしてドイツ語を学び、ドイツ語は非常に堪能であったうえに、ドイツの森林事情についても勉強していた。

これらが認められて、明治十八年十月から三年間、林学研究のため、ドイツ連邦ザクセン王国のターラント山林学校に留学を命じられた。

志賀がターラントについて半年も過ぎた頃、浜尾新が欧州視察のためドイツにやって来た。

浜尾は当時文部省の学務局長であった。浜尾は志賀の兄、志賀雷山の教え子であり、さらに志賀が大学南校に入学したとき、浜尾はその舎監であった。このため、浜尾と志賀はその後長年にわたり、親子のような信頼と愛情で結ばれた関係にあった。

浜尾はドイツ各地の林業を視察し、わが国の林業の振興と教育の充実の必要性を痛感した。

ターラント山林学校では、学校の裏手に数千ヘクタールの演習林があつて、いつでも実地研究ができる。しかも、この演習林は学術的に運営されているだけでなく、林業としての収益が非常に大きい。

これらの事情をつぶさに見聞した浜尾は、帰国すると間もなく、帝国大学総長に就任した。

明治二十六年、房州清澄寺の上地林であった三百八十ヘクタールの国有林が、位置も林相も大学演習林に適していると考え、志賀はこれを農商務省から大学へ移管することを計画した。ターラントの演習林を見てきた浜尾総長も、これに賛同して協力を惜しまなかった。

演習林創設にあたって、実際面で働いたのは、本多静六と川瀬善太郎の両教授であったが、農

商務省に広い人脈をもっていた志賀と、総長としての浜尾の支援が、演習林実現の原動力となった。

(四)

つぎに、本多自身が演習林の創設と運営に、どのようにかかわってきたかに焦点を絞って展開してみる。

明治二十三年農科大学が発足した後も、しばらくは、林学の実習は農商務省所管の官林で行われた。そのため種々の不都合が生じて、大学独自の演習林をもちたいという気運がもち上がってきた。

千葉演習林第三次経営案（大正六年）にはつぎのように記されている。

「明治二十五年十二月、本学本多助教教授学生実地指導のため、鹿野山より奥山を経て、房総一帯の森林を跋涉し、偶此地に來りしが、其一部浅間山の林相は此地方の天然林の林相を有するものにして、東京附近に於いては、容易に得難き学術上甚だ適當なるを認め、帰京の後、直に演習林設置の議を起し、爾來凡二個年間志賀（泰山、農商務省技師）其他の尽力する所ありて、ついに明治二十七年十一月、農科大学用地として交付せらるるに至れり。是実に農科大学演習林設置の嚆矢にして、同時に吾国に於ける学校附属演習林の濫觴たり」

この文章は、演習林の由来に関する文献の中で最も古いものと思われる。

しかし、農科大学内では、学長はじめ多くの

教授が、「そんな広い山をもらっても、世話する経費が全くないのに、どうするつもりか」と反対した。

「それなら私が学生と一緒に、植林も管理もやりましょう」と本多は主張をつらぬいた。その時、本多は三十歳の少壮助教教授であった。

翌二十八年春から、本多は造林に着手した。その頃清澄は、天津町から清澄の部落まで約一里の間、大部分が原野で、二里ほどのカヤヤスキが生い茂っていた。

植林に用いる苗木は東京駒場で育て、これを清澄まで輸送していた。苗木は弱って植付けても大部分が枯れてしまった。清澄寺参詣の人々は、「大学の先生が植えた苗木はよく枯れるのう」。

本多はこんな噂を耳にして、早朝、道路から見える枯れた苗木を抜いて歩いた。当時、演習林には常駐者もなく、設備もなかったから、当然の結果といえる。初期の造林の苦心がしのばれる。

このような貴重な体験を重ねた本多は、さらに演習林の充実と拡張に専念した。本多の念頭には、演習林を林学の教育研究用に役立てるほかに、大学の基本財産として、林学科発展の経済的基盤を確立するという願望があった。

明治三十年には、さらに千八百三十六ヘクタールを清澄演習林に追加編入して、現在に至っている。いまや、「清澄」は全国各地にある大学演習林

の代名詞として使われ、清澄の浅間山は林学のメッカとなった。清澄演習林は、現在正式には千葉演習林と呼ばれる。

本多は定年退官を間近にした大正十五年、造林実習日誌の緒言で、次のように回顧している。「顧みれば、予の造林実習は明治二十八年に創設し、其当初数年の間は、演習林の経費未だ多からずして、事務所寄宿舎等の設備も無き状態にあり、予は学生生徒と共に山口屋旅館（現今の清澄館）に起臥し、師弟相携へて、人夫同様の労務に服しつつ、毎春三四週間、連日植樹造林を行ひたりき。今日見る所の切通し南沢杉林、并に内外樹種見本林の大部分は、全く此等学生生徒の手に成りしものなり。

然るに、年と共に実習の方法亦改変し、最近十余年来、臨地講和が主となり、実地労作の如きは、僅か一日一種に過ぎざるに至れり。予は爰に本稿の上梓に会し、時流の変遷著しきを回想して、転た今昔の感に堪えざるものあり。

予浅学の乏を以て、演習林の実地指導に当ること前後三十二回、清澄山に登ること殆んど五十回、予が手植にかかる南沢の杉林は、既に電柱大の巨木となり、参道沿いの桜並木亦三十年來嘗て陽春の粧いを忘れず。

然れども、今や漸く時到って、其盛期を過ぎなんとし、予亦何時しか老境に入り、近く停年制によりて、三十五年勤続の教職を退かんとす。噫々花も人も千象万物何れが時の威力に征服せられざるものやある。

莫進（さもあらばあれ）我等は精霊の不滅なることを信じて疑わず。樹の精、人の霊、希くは永へに伝へらるる事に依りて生き、著はるる名に由りて遺るものあらんか。又以て自ら慰むるに足る。」

本多は昭和二年三月停年退官して、演習林の本多時代は終わった。林学科第二講座（造林学）は中村賢太郎助教が引き続くことになった。

(五)

演習林開設の当初は、本多は学生生徒と共に、作業人夫のように、自ら植林に汗を流した。その生々しい造林実習記録を服部正一が発表している。これは本多が清澄で行った第一回目（明治二十八年）の実施演習で、当時の有様が手に取るように見える。その内容は一週間にわたる作業で、最後はつぎのように結んでいる。

「……十日（明治二十八年四月）快晴。午前中は器械の整理と荷造りを終る。天津に下って海岸で磯遊を催す。サザエ、アワビの類山の如く獲り、これらをもって井筒亭に行き慰勞会を開く。酒宴の間に剣舞あり、詩吟あり、琵琶あり、先生と学生生徒一団となり、和氣藹々の雰囲気となった。一週間の疲れも洗い去り、残るものはただ海上の漁火と、山の端にかがる明月のみであった。」

大学演習林は、本来林学科の学生教師の実習と研究に資するための施設であり、その管理維持には多額の費用が必要である。設置の当初は



⑤「造林実習・本多博士の夜の楽」(T14.4.8)

④「造林実習・浅間山頂における本多博士の講話」(T14.4)ともに東京大学農学部附属千葉演習林事務所提供



全額つぎ込みとなるが、やがて成長した樹林の間伐や択伐による収入が返ってくる。本多は初めからこの収入を想定していた。

明治から大正時代にかけて、日本の大学もようやく整備されて、多くの後進が育ってきた。当然の結果として、学内では教授停年制が提案され、全学の総意となった。

しかし、勇退者には既定の恩給のほかに、ある程度加給して、退官後の生活を守ってやらねばならない。これは国家が処理すべき問題であるが、当時の緊縮財政では一切認められなかった。そのため歴代の総長は、この問題を解決できず、苦慮しながら去っていった。

永久に実現しないであろうと思われた教授停年制は、農学部出身の古在直道総長によって解決された。

本多は親友の古在総長に協力し、間伐材の払い下げによる多額の収入を、停年制実施に必要な財源として提供した。林学科内には、以前から間伐量をもっと増すべきだとの意見があったが、本多はこれを最小限にとどめるよう厳しくチェックしてきた。それは緊急な金が必要なこともあろうかと想定してのことであった。

大正十一年三月、懸案の停年制は実現した。この制度はその後長年にわたり続くことになる。古在は歴代総長の中でも、名総長の一人に数えられる。

【参考文献】

1. 演習林研究部・千葉演習林(一九七四) 千葉

演習林沿革史資料(一)、演習林(東大)一八号
2. 根岸賢一郎・鈴木誠・斯波義宏(一九九一)、
千葉演習林沿革史資料(三)、東京大学農学部
林科学学生の造林学現地実習の変遷―、演習
林(東大)二八号

3. 服部正一(一九九五)、農科大学造林演習記
事、山林一四九号、五十一―五七

4. 本多静六(一九九六)、新植せる苗木の枯死
を防ぐ方法、山林一六一号、四三―四九

5. 本多静六(一九三二)、私の関係した事業二
三、明治林業逸史続編、大日本山林会編、三
八五―三九七

6. 片山茂樹(一九六二)、志賀泰山先生、林業
先人伝、日林協編、七五―一二六

7. 右田半四郎(一九三一)、中央に於ける林業
教育機関の沿革、明治林業逸史、大日本山林
会編、二二二―二六五

8. 中村賢太郎(一九六二)、本多静六先生、林
業先人伝、日林協編、三三五―三七二

9. 本多静六(一九五二)、本多静六体験八十五
年、講談社

10. 東京大学農学部附属千葉演習林(一九八一)、
視察案内

11. 雑報(一九二二)、房州清澄山に於ける造林学
実習と参観者注意、山林三五一号、五四―五五

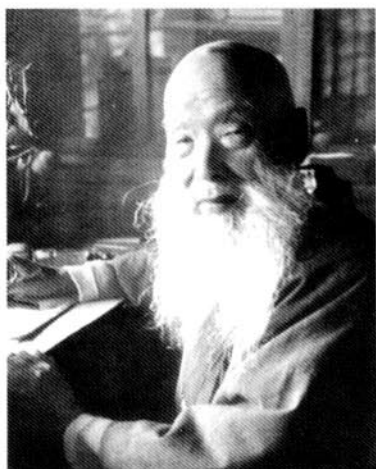
編集室から/遠山先生には、奥様が本多博士の御
曾孫に当たられることから、顕彰事業の推進にあ
たりいろいろとご指導ご協力を頂いております。

本多博士の奨学金と貴い教訓の数々

埼玉県樹木医会会長 樹木医 横川 登代司

■ 本多博士育英制度の経緯

本多静六博士は自分が苦学を経験していたので、同じ苦学の道を歩もうとする学生達のために、育英事業（奨学金制度）の基盤を築かれたのである。それは、自分自身で努力をして現役時代のライフワークの中で、四分の一俵約天引き貯金を欠かさず実行して得た貯蓄財源を基金として、数年間に八〇〇〇〇〇（八〇万〇〇〇）の奥秩父の山林を買入れ、その一部（三〇〇〇〇〇）を母校東大農学部に譲ったのである。



晩年の本多博士

そしてこの譲渡金を残った山林の経営に投入して目的達成を試みたが、大学教授の片手間に行う仕事だったので思うようにならず、色々と考えた揚句、昭和五年（一九三〇）に手持ちの

全山林を、条件を付して埼玉県に寄附することとした。

寄附を受けた県では、博士の趣旨に沿うべく収約な森林管理を行った結果、年々収益が上ったのである。

しかしこの間、昭和二十三年十月に県庁舎が火災に遭い、庁舎再建のために中津川県有林の増伐措置がとられる等、再建費用の一部を補填したこともあったといわれ、県の貴重な財産としての隠れた存在意義もあったわけである。

寄附を受けて二十三年後の昭和二十八年三月に至って目標とする積立額（当初博士の要望基金額一〇〇万円）条例の一部改正により一〇〇〇万円を達成することができ、育英事業が実施できる途が開かれたのである。

基金ばかりでなく、博士の日常の貴重な抜粋記録として、林学等を学んだ者は、必ずポケット版の書籍「森林家必携」を紐解き、勉強したものである。この書籍の初版は、明治三十七年（一九〇四）九月に「知識の庫」The Store of Knowledgeとして博士が最初に発刊した林学の収積収集帳とも云われるものである。現在では改訂に改訂を重ね、ほぼ一〇〇版に近いものとして、林業に携わる人々には手放せない座右の銘となっている程である。

■ 貴い教訓の数々

本多静六博士は、多くの教訓も残しており、それらをいま我々が受継ぎ、博士に報いることであろう。それらを今ここに披露するとつぎのとおりである。

○ 人生は努力、努力は幸福なり

自分の現職は、努力なしに幸福は得られない。努力して始めて慰安、休息が得られるものである。始めは少々苦痛を感じるものの、専心努力すれば仕事が容易になり、仕事を道楽化できる。

○ 自分を確立させる

自分が食うに困っていたり、病に罹っている他人の面倒は見られない。自分が成功者となれば、他人を助けることができる。

○ 良き友を選べ

人間は友達の感化を受け易い。悪友のために墮落する人もいる。互いに助け合える友人を得ることは、幸福であり成功の基となる。自分より幾分優れていて、強い実行力のある人と交わること。

○ 悪い癖を直せ

悪癖を直す方法として、陰気な人は陽気になるよう心掛け、意地悪根性、ねたみ、人の落ち目を喜ぶような人は、極力人の善所長所を褒め、お人よしを心掛けること。

○ 好機を逃すな

一度決めた職はやめないようにし、好機を逃せず見聞調査し、要点をよく覚えおく。投機的事業に足を踏み入れないこと。



博士がこよなく愛した秩父・大滝村中津川溪谷、奥に見える山が博士が県に寄贈した中津川県有林

○ 目的は順を追って進め

始めから高望みせず、小目的から一步一步体験を積み重ね、大きな目的に進むこと。

○ 明朗快活な人になれ

暗い顔をした人に接すると不安な感じが与えられる。負け惜しみや偽りをいわず、知らないことは人によく聞くようにする。

○ 自分の潜在力を生かせ

人には日常自分にはわからない隠れた力があるもので、いざという時に現れるものであるか

ら、何事にも全力を集中してやることである。どんな力のない人でも、これを実行さえすれば、相当の仕事が達成できるものである。この反面有能な人でも、多くの目的に力を分散すればどの仕事もまとまらない。

水滴も絶え間なく落下すれば岩をも穿つが、一時の激流の水は、岩の表面に何の痕跡も止めないのと同じことである。

○ 一度決めた専門や職を変えるな

人が学校や職業を選ぶには、自分の能力適性をよく考え、親や先輩に相談すべきであり、一度決めた以上は、これを天与のものとして心得て、その業に励めばその仕事が自分のものとなり、自分に適するようになる。意思堅固な人は多くの苦難に耐え、人生の波瀾万丈を体験し、その苦痛が快楽に進む過程であることを悟り、人生の境地に達するものである。

○ 仕事を延ばさない様に工夫をせよ

今日まとめられるものは、今日のうち手際良くまとめ、先へ先へと進み、後に残さないように工夫する習慣をつける。

仕事をためると仕事に終われるばかりでなく、仕事に支配され、仕事が苦痛となる。多少寝るのが遅くなっても、用事を済ませて安心して眠るようにした方がよい。

○ 病気になるなぬよう心掛けよ

人は不平を云わないこと、怒らないことは病気になるない予防である。人の生活は労働を基調とし、遊惰は決して自分の心に喜びと平和を



博士の著書として現在でも出版されている『自分を生かす人生』と『森林家必携』

もたらすものではない。また仕事に励んでいれば怒る暇がないものである。規則正しい生活を送り、飲食も腹八分にする。

絶えず愉快に働き、朝は早起きし、感謝に眠り、新鮮な空気を吸い、日光浴をし、食物を美味しく食べることである。

○ 善を行い美を味わえ

自他の幸福に貢献することを心掛け、手近なことから快活に実行する。出来るだけ精神力で物質欲を押さえ、努力して自分の現在に感謝し、将来の希望に向かって生きることである。そう

すれば美しい心の持ち主になれる。

○ 逆境の時は暫く待て

「待つことを知るは成功の秘訣」とあるように、苦しい時に耐え忍べば、やがて希望が生まれ、解決の糸口が掴めるものである。大成功は大苦難を克服して初めて得られるものである。

不幸、不景気は永久に続くものではなく、時が過ぎれば必ずそれと反対になることもある。順境の時に仕事を十分しておき、逆境に見舞われる立場に立たされた時には、知識を養い実力を蓄えておき、風雲が再度来襲すれば時を移さず猛然とこれに対峙するが、無理をしてはいけない。

○ 勤儉貯蓄せよ

成功の第一歩は他人から援助を受けないこと。経済の基礎は勤儉貯蓄であり、富を作ることである。

自分が経済的に独立するには、積極的に働き消極的に節約することで、この決心には勇気がある。残ったら貯金するのではなく、収入の四分の一天引貯金することで年々雪だるま式に増え、十年後には相当の貯蓄額となる。かくして持前の業に成功することができる。

○ 慢心を慎め

何事をするにも始めは熟慮して、その道の先輩や学者に相談すれば失敗は少ないが、順風に乗って成功すると自分一人で偉くなった気になり、第三者の意見・忠告を聞かず、未

開の仕事に手を出して逆風を呼び込み、失敗することがある。自分の地位や能力を鼻にかけて人を見下すことをせず、謙虚に対応し反感を買わないようにする。

○ 既往の事は咎めず成事は説かず

過去のことはたとえ気に入らないことがあっても、くどくどと叱つたりはしないこと。相手の感情を害するので、穏やかに注意すること大切である。

○ 三度辞して従わぬは礼にあらざ

遠慮するのも二度まではよいが、三度以上になると社交辞令を複雑にし、不愉快にすることを肝に命じなければならぬ。

○ 自分一人いい子になるな

自分の成功は仲間や社会のお陰なので、一人占めにせず、つとめて人に譲り、責は自ら負うようにすれば、その人は誰からも一緒に仕事をしようと望まれるし、周りの人から押し上げられるようになるものである。

○ 善を賞し悪を問うな

人は褒められれば気分はいいが、欠点をつかれると嫌気をおこす。先ず相手のよい点を褒めて希望を持たせておき、そのあと親切に悪いことを諭すようにする。

○ 新しい問題の依頼には即答を避けよ

重大な要件を依頼された場合には、軽率に引受けて断るのは後悔が多い。したがって自分に出るかどうかを熟慮の上返答すること。

○ 一度引受けた仕事は親切確実にせよ

依頼された仕事が小さい仕事であっても、い加減にはしてはならない。これが習慣になって、大事なことで粗末にするような無責任な人間になり、信頼が得られなくなるものである。

○ 批判する時は改良案を提示せよ

他人の説や仕事の批評をする際は、親切に改良案を添えること。単にその説を攻撃したり、破壊したりしては敵をつくるばかりで、人の為にならず大損をする。

【横川登代司氏の略歴】現在の宇都宮大学農学部卒業、埼玉県林業試験場長、樹木医一期生、環境工学研究所取締役、エート環境診断所代表取締役等を歴任、現在日本樹木医会副会長、埼玉県樹木医会会長



葛蒲町大字河原井・幸福寺にあるサイカチの木（9頁本文参考写真）

垣間見る偉人

本多静六博士を記念する会
会長 樹木医 小山 千秋



明治神宮南参道鳥居のそばにある
のが河原井の吉野家から献木され
たというクスノキ

はじめに、本多静六博士のことを地元の人たちは「ハカセ」と呼んでいたもので、以降博士とする。造園界の片隅を歩きながら、樹木医の仕事に携わる町民として、折にふれて聞いた話や、治療に応用していることもあるので、紹介する。

○その一 折原家（博士の生家）の近所或いは親戚からも明治神宮に献木した。博士の「根を焼いてくるように」の言に應えて焼いた。「こんなに焼かなくも良かった。これでは炭だよ」と言われた。運搬に当たった部落の青年十名が、吉野家から、大八車に積んで出立。中仙道まで

二カ所の坂を越えて、あとは志村の難所、頑張って一気に挑んだ坂も、空腹と疲労に耐え兼ね、坂の途中で休憩となった。そこまでは良かったが、景気つけの一杯に火が付き、飲みすぎて車の下に野宿することになった。翌朝早立ちで神宮に着く。博士に叱られると思ったら、「ご苦労さん」と礼を言われた。（吉野氏談）

○その二 折原家では、毎年暮に親戚へ正月の餅を配る。昭和二十一年のこと、家人の折原致一さんと隣家の山田さん（当時中学一年）で伊東の本多家へ持参した。初めて会った七十九歳の博士は、かくしゃくとした、優しいひげの老人だった。お昼になり、山盛りのさつまいもをご馳走になった。食後にみかんは良いんだよと房ごと食べる博士にならって食べた。帰りにどっさりもらって来た。（山田氏談）

○その三 昭和二十四年頃、折原金吾氏が伊東の山奥に博士を尋ねた。家の中は暗くて、ラジオが鳴っていた。私もさつまいもをご馳走になった。皮をむいて食べたなら叱られたことを覚えている。因に皮ごと食べれば胸焼けしないことは事実である。食後にみかんを食べ、みやげにもらってきた。あの質素な生活と自然が長生きの元なんかね。（折原氏談）

○その四 公園や観光計画等で、博士のご指導を仰ぐと、日本中どこへでも出向き、自ら山に登り、木に登り、沢を歩いて十分な実地踏査を行う。又晚餐には土地の古老を交えて談笑しながら、社会環境を具に把握する。夜のうちに調

査をまとめ、迅速に開発や設計の概要を作り、発表講演会を開き、終了するとその足で次の場へ廻るのが普通のようなのである。（時間の節約、率先実行、それらの資料は東京大学森林風致計画研究室に保管されている）

○その五 サイカチ砂場。昭和十二年頃から青年団のスポーツ大会が盛んになり、部落毎に夜間練習を行うようになった。河原井地区では、幸福寺（折原家菩提寺）のサイカチの木の下に砂場を作り、サイカチ砂場と言った。この木は既報の通り博士が遊んだ木である。当時幹には子供が遊べる程の空洞が出来ていた。そこに砲丸や高跳びのポール、投槍、箒等をしまっておいた。（八頁写真参照・当時活躍した本沢氏談）

その木も今や、墓地の造成で根を切られて衰退し、幹は枯れて崩落し、板状に残った一部の幹が再生して立派な二世に叢生している。以上の話から、博士は植物の生命力と自然界に施す恵みをいかに取り入れ享受するか、すべて木を中心に、人間を従に考えて事を成して来た。その結果、偉業はすべて博士の計画通りに、木、林、森、公園、観光地として、後世にまでその役割を果たしている。黒い森を造成したドイツ林学の理念が伺えるような気がする。

博士の偉業は、学界、林業、造園界のみならず、広く、経済界、官界、実業界にも多くの業績を残していることは既報の通りである。今後博士の偉大すぎて見えにくい、普通人としての一面を紹介すべく努力したいと思えます。

「日本の公園の父」本多静六博士

—愛知・岐阜両県下における公園設計の事例を中心に—

菖蒲町企画財務課 渋谷 克美

■はじめに

本県出身の本多静六博士（一八六六—一九五二）は、日本最初の林学博士として造林学・造園学等の基礎を築くとともに、林学の分野における森林美学を応用し、全国各地の公園設計に携わりました。

その足跡は、北は北海道から南は鹿児島県にまで及び、設計に当たった公園の数は、大小合わせて数百に及ぶといわれています。

中でも、東京の日比谷公園、明治神宮、名古屋の鶴舞公園、福岡の大濠公園等はその代表例ともいえます。

公園の設計について本多博士は、「私は、私の本務である造林学研究の余暇、ほんの少し森林美学の応用として各地公園の設計を引き受けている。その数は大小数十にも達しているが、これはいわゆる道楽でやっているものである」（大正三年・北海道「大沼公園改良案」より）と述べています。

明治・大正・昭和初期と、公園の必要性が社会的に広く認識されていなかった当時において、その必要性を説き、国立公園の設立に尽力すると共に、自ら全国各地の公園の設計に当たった本多博士は、近代日本における「公園の父」といっても過言ではありません。

本多博士の出身地である菖蒲町では、博士の業績を顕彰しようと、町民有志による「本多静六博士を記念する会」を平成四年に組織し、様々な調査活動を行いながら、これらの成果を「本多静六通信」にまとめ情報を発信しています。

今回は、全国各地に散在する博士が設計した公園の中から、愛知県名古屋市の「鶴舞公園」と「中村公園」、岐阜県岐阜市の「岐阜公園」、同県養老町の「養老公園」にスポットをあて、当時の設計資料や新聞資料等を用いながらこれらの公園をご紹介します。

■名古屋市の和洋折衷の大公園「鶴舞公園」

名古屋市のほぼ中央に位置する鶴舞公園（面積約二十四ヘクタール）は、同市が設置した最初の公園で明治四十二年の開園です。翌四十三年に鶴舞公園を会場に第十回関西府県連合共進会（生産品や技術を一堂に集めて、その交流・発達を図るために行われた催）が開催され、それに併せて現在同公園のシンボルとなっている噴水塔や奏楽堂が造られました。

本多博士が鶴舞公園の改良設計に当たったのは、共進会後の明治四十五年のことでした。この年、市は公園計画を再検討し、その設計を本

多博士に依頼しました。このことについて同市発行の公園パンフレットには、「設計は、全体計画が本多静六林学博士、鈴木禎次工学士が行った。日本庭園は村瀬玄中、松尾宗五の両宗匠が行った。共進会終了後、共進会の施設としても使われた噴水塔や奏楽堂などを取り込みながら本格的な造園工事が始まり、大正九年ごろには近世フランス式の洋風庭園と迴遊式の日本庭園とを合わせもつ和洋折衷の大公園がほぼ完成したのである」とあります。

設計の概要は、園内を五区に分け、第一区と第二区をフランス式遊園に、第三区と第四区を日本庭園に、第五区を和洋折衷にしたものでした。市内の公園としては面積が広く、しかも敷地の大部分が平坦地であったにもかかわらず、丘陵や築山、池泉、溪流などを取り入れた変化に富んだ公園となりました。

こうして明治四十五年から始まった公園整備事業は、九年間継続事業として行われ、その間にも運動場や動物園をはじめ様々な施設整備が行われ、大正九年にはほぼ現在の公園の形が完成しました。

また、公園整備の様子は随時新聞でも紹介されました。一例を示すと、「鶴舞公園の新運動場（見出し） 鶴舞公園新運動場は同公園南西部の平地にして、先ず七千余坪、周囲三分の一マイルの楕円形の自転車乃至競争のグラウンドを作り、其内約三分の二の地域をベースボールグラウンドとし、昨日も慶応菅瀬選手実地に踏

日本庭園が美しい豊臣秀吉ゆかりの中村公園、手前の池はひょうたん池



明治42年開園の鶴舞公園、右手奥が公園のシンボルとなっている噴水塔

査し、光線其他の点に付き色々意見を提出したる由にて、又前記大グラウンドの内には野球場の外に周囲約二百ヤードの小運動場を作る筈にて、又別に地を選び約四ヶ所のテニスコートを作り、芝生を植付けベンチ等も設けて遊戯に便ならしめる由」(大正元年十一月十四日付・新愛知新聞より)とあります。

大都市名古屋の市街地に位置する鶴舞公園は、本多博士が初めて設計に携わった東京の日比谷公園と同じく、今では都会のオアシスとして市民の憩いの場となっています。

■豊臣秀吉ゆかりの公園「中村公園」

市内中村区に位置する中村公園は、明治三十五年(1902年)に県営公園として開園し、その後大正十一年(1926年)に名古屋市の移管されました。現在の公園の広さは約五ヘクタールで、豊国神社を中心に据えた本園と、東園、西園、競輪場とからなっています。

本多博士による中村公園の改良設計は大正六年(1921年)に行われました。

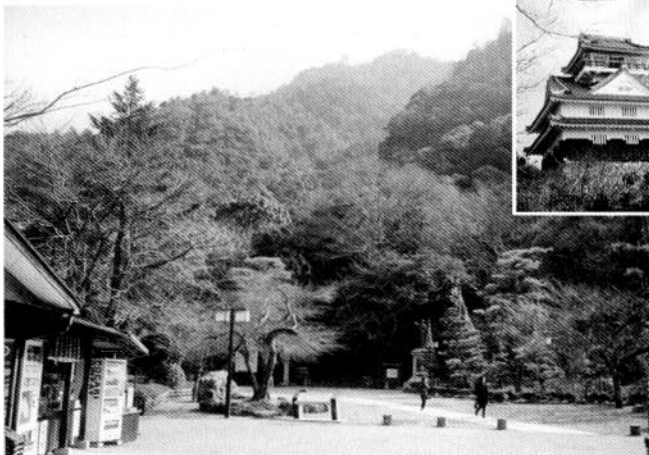
当時の愛知県知事・松井茂は、県議会(大正六年十一月二十六日)において中村公園の改良計画を提案するに当たって、「中村公園のごときは日本においても有名なる古英雄の跡でありますから立派な計画をたて、これが改良を図る必要があると存じまして、農科大学教授の本多静六博士はわが国におけるこの公園改良においては有名なる方であって、これまで各地

の公園についてその設計をいたされた人であり、ますから、博士に依頼いたしました計画を立て、ここに中村公園の改良費を提案いたしました次第でございます」と述べました(財名古屋公園緑地協会「中村公園」より)。

さらに、「清洲におけるこの信長公の跡のごとき、また家康公の岡崎市の跡のごとき、これが保存の方法はいずれも愛知県としても考慮せねばならぬところの問題」として、中村公園・清洲公園・岡崎公園の三つの公園についても併せて本多博士に公園の設計を依頼した旨を報告しました。

愛知県より三公園の設計の依頼を受けた本多博士は、県議会に先立つ八か月前の大正六年三月十七日に中村公園を視察しました。その時の模様について新聞は、「本多博士視察(見出し)十五日岡崎公園を視察後十六日夜来名したる本多博士は、十七日午前九時愛知県庁に登庁、視察事項打合せの後自動車にて先づ清洲公園を視察、帰途中村公園に立寄り、十八日は浅野木工場を視察したる後、知事に対し視察せし結果に就て意見を報告の上、同夜帰京する筈なり」(大正六年三月十七日付・新愛知新聞より)と報じ、さらに翌十八日の新聞で「十六日夜岡崎より来名したる本多林学博士は、十七日午前十時半松井知事と自動車に同乗し、史跡保存の目的を以て清洲公園及び浅野長政の宅址なる丹羽郡西成村浅野公園を視察したり、十八日は愛知県中村公園を視察し、其の結果を知事に報告の

金華山全体が公園となっている岐阜公園、山頂(329m)には公園のシンボル岐阜城がある(右)



上同夕六時帰東する筈」というように博士の行動を詳細に報道しました。
本多博士の公園現地踏査は、新聞報道からもわかるように一刻の時間も無駄にはしないという、いかにも博士らしい慌ただしいものでした。なお、この時の現地踏査にあたっては、松井知事のほか弟子の田村剛林学士、河野郡長、浅野郡視学官らが同行しました。
こうして現地踏査を終えた本多博士は、帰京

するやいなや「中村公園改良策」と題した設計書を作成し県当局へ送りました。県ではこれを印刷し、その年十一月の県議会での参考資料としました。

設計書の内容は、一 設計の方針、二 区画並びに特徴景観、三 改良の主眼点、四 局部改良案(公園を六区画に分け、其一 神苑・其二 日本式造園区・其三 運動場区・其四 花壇区・其五 記念館区・其六 自然式造園区)、五 拡張案、というもので、県議会での議案が通過した後、新聞紙上でもこれらの内容が細かく報道されました。その時の新聞(大正六年十一月二十九日付・新愛知新聞)の見出しは、
「中村公園は良くなる 一万八千円の費用を投じて三年間に面目を改めんとする計画」という、公園改良計画への大きな期待が寄せられたものでした。

■財政難でなかなか実現できなかった

「岐阜公園」

明治十五年開園という古い歴史をもつ岐阜公園は、鵜飼いで有名な長良川を見下ろす金華山とその山麓を区域とする面積約二十ヘクタールの公園で、平成四年に周辺地区も含めて都市景観百選(建設大臣賞)に選ばれました。

園内には歴史博物館や和名昆虫博物館をはじめ、水族館、美術館、茶室など様々な施設が整備されています。またロープウエーを使って登ることのできる金華山(標高三百二十九メートル)

ル)には、斎藤道三・織田信長ゆかりの岐阜城があり、天守閣の展望台からは長良川はもとより、濃尾平野や遠く伊勢湾を望むことができま

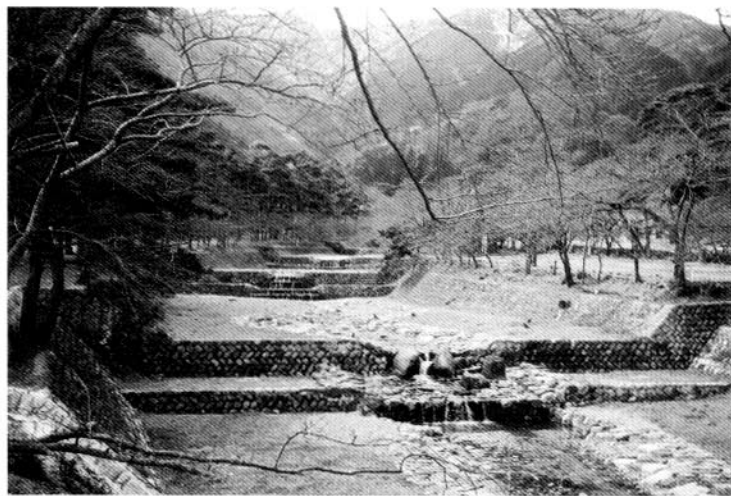
す。
『岐阜市史』によると、明治十五年に当初県営(明治二十六年に市へ移管)により開園された公園もしばらくは放置の状態が続き、整備されるのは明治二十年頃になってからでした。しかし、この時の整備も中途半端であったためその後の利用は思わしくなく、明治末期になってようやく整備の機運が高まったという状態でした。

この頃の状況を当時の新聞で見ると、「岐阜公園の拡張(見出し) 人口十万人に対する設備、稲葉山一帯の大遊園地 市の保勝会が一部人士の嘲笑を浴びながら金華山上に模擬天守閣を建設し、織田右府在城の昔を偲ぶよすがとなしたる以来、意外の成功を収めて雨中と雖も他国人の登山絶えざる事はしばしば報じたる所なり。其後保勝会にては天守閣の成功に勢ひを得て、更に金華山より以南瑞龍寺山迄一帯を開発して一大遊園場となすべく、一昨年(明治四十三年)本多林学博士を聘して実地の踏査を乞ひたるが、何分十数万円を要する大計画にて、當時は単に同博士の公園設備に対する意見を聴取したるに過ぎざりしも既報のごとく、(以下略・傍点筆者)(明治四十五年三月十七日付・岐阜日日新聞より)」という状況でした。
しかし一方で、鉄道の敷設に併せて岐阜公園



園内の道路沿いには歴史を感じさせる土産物屋が軒を並べ、博士考案の「養老酒」「養老豆」等が売られている

川沿いに広がる養老公園は桜の名所でもある。ここから徒歩15分ほど登ったところに名瀑「養老の滝」がある。



への観光客の誘致を見込んだ美濃電鉄会社は、公園の早期整備を促進するため、明治四十五年岐阜市に対し、公園改良整備の資金として一万五千円の寄附を行いました。市ではこれを受けさらに市の経費五千円を加え、合計二万円の予算で公園の改良整備に着手することになりました。そしてこの時の公園設計には、本多博士と同時期に日比谷公園の設計コンペに参加した東京在住の技師長岡安平氏が当たることになりました。これは長岡氏が専門の技師であるということ以上に、本多博士の設計では十数万円の経費が必要となることから、あえて長岡氏に設計を依頼したとも考えられます。

公園整備計画についての市の考え方を新聞資料で見ると、「天下の奇観たる長良川の鵜飼観覧客と併せて観光の内外人を市内に勧誘するの手段として公園の整備は一日も忽諸（なござり）にすること）すべからざるを觀受し居れる事として、来月（六月）上旬に長岡氏の来岐を機として設計するに随って工事に着手し、是非共本年度即ち明年四月迄には整理を完整する予定」（明治四十五年五月二十三日付・岐阜日日新聞より）という計画で、単年度での整備計画を予定していました。

しかし実際には、市当局が思うようにことは進みませんでした。公園整備の必要性は認識しながらも、設計・施工の期間を短く考えるなど、計画自体に甘さが窺えるものでした。結局、長岡氏の設計が出来上がったのはその年の末で、

翌大正二年一月十二日開会の市参事会において初めてその内容が明らかにされました。

長岡氏の設計した公園は、岐阜公園を「世界の名公園」にしようとするもので、事業費は本多博士の倍に当たる三十余万円というものでした。美濃電鉄の寄附金を含めた公園整備予算が一万七千円となった市当局にとって、この計画は「不生産的の事業費を市費として徴収するは全然不可能に属するを以て強いて公園整理を断行せんと欲せば其財源は勢い起債にまたざるべからざるも、：（中略）：公園整理費のごとき不生産的の事業費に対する起債は容易に認可を与へざるに依り旁々公園整理はここ数年間には到底実行すること能わざるべし」（大正二年六月四日付・岐阜日日新聞より）ということで、結局、この時期本格的な公園整備は行われませんでした。

その後昭和十二年に岐阜公園は区域が拡張され、ほぼ現在の面積となり、この頃から本多博士や長岡氏が作った公園設計が基礎となった整備が進められるようになりました。

■養老鉄道の開通にあわせて整備された

「養老公園」

明治十三年開園という長い歴史をもつ県営養老公園は、総面積約七十九ヘクタールの大公園で、園内には日本三名瀑の一つ「養老の滝」をはじめ、由緒ある神社・仏閣、史跡、霊泉（菊水泉―日本名水百選）などがあります。

また最近では、こどもの国(遊園地)やキャンプ場、パターゴルフ場、テーマパーク「養老天命反転地」等が整備され、年間百万人を超える観光客が訪れる岐阜県を代表する観光地ともなっています。

養老公園は、開園当時は地元有力者の組織である偕楽社により運営されていましたが、経営難から明治三十年多芸郡に、さらに同三十五年郡名の変更に伴い養老郡が管理・運営するところとなりました。そして大正十二年の郡制廃止に伴い、公園の管理が岐阜県へ移り、県内初の県営公園となりました。

本多博士が養老公園の設計を行ったのは大正元年のことでした。その背景として、明治四十四年の春に現在の近鉄養老線が計画され、大正二年七月三十一日に大垣から養老まで鉄道が開通したことがあげられます。

本多博士は養老公園の改良設計に当たり、現地踏査後、公園内の千歳楼(旅館)で行った講演のなかで、養老鉄道の開通によせて「今この養老鉄道が直ぐ下に停車場を造るということになれば、先づ庫の戸前を半分位開けた様なものである、余程この公園の設備に対して助かるのであります。(中略)：今までは御承知のとおり大垣から人力に乗っても一時間半は掛る、歩いて来れば三時間も四時間も掛る。然るに汽車なればそこを僅か二十分か三十分で着くことが出来るのである。それだけこの公園が大垣の方へ引付けられたと同じような関係を持つので

あります」と述べています。

このことから、養老鉄道の計画を機に、公園への観光客の誘致を目的に、本多博士に公園の改良設計を依頼したことがわかります。本多博士が、具体的に大正元年のいつ養老公園を訪れたかは不明ですが、設計資料から博士が二日間の現地踏査を経て改良設計を作ったことがわかります。

その主な内容は、①交通機関・園内道路の整備、②植栽計画、③施設の整備(ベンチ・便所・ホテル・温泉場・植物園・果樹園・動物園・運動場・展望台等)、④観光対策(絵葉書・パンフレット・案内表示板・名物をつくること・保安林の整備等)で、公園整備のハード面から経営上のソフト面にまで幅広い視点から改良計画が作られています。

中でも「名物をつくらねばならぬ」というのは如何にも本多博士らしい発想で、この時例示された「養老酒」「養老豆」が、現在、養老公園のお土産品として売られていることは大変興味深いことです。

さて、養老鉄道は大正二年七月三十一日に終点養老駅まで開通しましたが、開通・開駅式は少し遅れ、翌八月十日大垣公園での開通式を皮切りに、十六日まで各駅において開駅式が行われました。この内大垣公園で行われた開通式には知事、郡長、町長ら六百余人余の来賓が参加しました。また養老公園の玄関口となる養老駅の開駅式は十五、十六日の二日間にわたって行わ

れ、余興として寄合相撲や撤餅(さくもち)、芸妓の手踊り、花火大会等が盛大に行われました。

なお、養老公園の調査に当たりましては、(財)花の都ぎふ花と緑の推進センター養老公園事務所三輪所長様並びに同事務所木村様に、本多博士の改良案と現状との比較をはじめ、博士の現地踏査日時等の特定にあたり、並々ならぬ御苦労御協力を賜りましたことに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

■ むすびにかえて

本稿を取りまとめる最中に、長崎県大村市の方から「今度大村市でも郷土出身の長岡安平の顕彰事業を行うことになったので、本多博士の顕彰事業を参考にさせて欲しい」という電話を頂き、早速電話の翌週にご来町を頂き情報交換を行いました。そこで初めて、今回、岐阜公園の設計者として名前の出た長岡安平氏について情報を得ることができました。

長岡氏は天保十三(一八四二)年生まれで、本多博士より丁度二回り年高になります。同氏は独学で造園技術を学び、東京の芝公園をはじめ全国各地四十数か所の公園を設計しました。その中には本多博士が設計に携わった巖島公園(宮島公園)や金沢の卯辰山公園、そして今回調査した岐阜公園、養老公園などが含まれています。今後は、お互いの情報交換をおして、公園設計の分野にける顕彰事業の推進が一層図られそうです。

埼玉学生誘掖会と本多静六博士

菖蒲町企画財務課 渋谷 克美

■ 埼玉県人による県人のための学生寮

JR中央線飯田橋駅から徒歩五、六分という、交通の便のよい都会の一等地に「埼玉学生誘掖会」という、埼玉県出身の学生のための寮があります。住所は新宿区市谷砂土原町、道を挟んだ寮の隣には最高裁判所長官の公邸があります。眼下に深緑の水を湛えた外濠を、対岸の奥に靖国神社の杜を望む高台の一角に、鉄筋コンクリート造り二階建てという現在の学生寮が建てられたのは、昭和十一年のことでした。



北川代行の監督舎での事務会誘掖学生
川さん、背後の肖像画は渋沢栄一翁

東京のほぼ中心にありながら、閑静な住宅地に位置する学生寮は、学生にとって最高の生活環境にあるといえます。炊事場やトイレ等は共同というものの、各部屋の広さは四畳半で家賃は月額一万円、その他光熱水費の一万円を加えても、今時都心でこれだけ安い下宿を探すことはまず不可能でしょう。

この土地に初めて学生寮が建てられたのは明治三十七（一九〇四）年のことでした。当時は、今の敷地の倍以上の広さの土地に木造二階建ての建物が建ち、付属施設として図書室や柔道場、剣道場等がありました。

この埼玉学生誘掖会は、後輩学生の修学を案じた郷土の篤志家たちが、力を合わせてつくったもので、初代会頭には本県を代表する実業家渋沢栄一が、そして初代寄宿舎監督（舎監）には本多静六が就任しました。

以来、今日に至るまで数千人にも及ぶ優秀な学生が輩出され、本県の教育向上と国家レベルにおける社会経済の発展に大きく寄与してきました。

今回は、財団法人埼玉学生誘掖会舎監代行の北川宏之さん、並びに埼玉学生誘掖会ご出身の長谷川清さん（同会前監事・羽生市在住、現羽生市立図書館兼郷土資料館長）、保泉欣嗣さん

（同会監事・行田市在住、現若葉保育園理事長・行田市教育委員）に調査に当たりご協力を頂きました。この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

■ 埼玉学友会の成立と寄宿舎設立運動

明治二十年頃に至って、都内に寄宿する在学の有志により「埼玉学友会」が設立されました。学友会の目的は、在京学生やOBとの連絡を取り合いながら団結を強め、切磋琢磨することでしたが、経済的な理由等からなかなか思うようにいきませんでした。

学友会創立十年余を経過した頃、当時会員であった諸井六郎（明治五年生れ、外交官）、諸井四郎（明治二年生れ、実業家）、渋沢元治（明治九年生れ、渋沢栄一の甥、電気工学者）らが中心となって、埼玉県出身の学生のための寄宿舎の建設を計画しました。その資金集めのため県内有力者に寄附を募りましたが、さらにその強固策として、渋沢栄一の学友会会頭就任を懇請し、承諾を得ることに成功しました。

かくして埼玉学友会では、明治三十四（一九〇一）年二月に寄宿舎建設を意図した評議員会を開き、議決に基づき、次の十一名による調査委員会を設け、本県学生の誘掖（導き助けること）の方策を調査・検討することになりました。

- ① 長谷川敬助（嘉永三年生れ、県会議長）、
- ② 本多静六（慶応二年生れ・林学博士）、
- ③ 吉田市十郎（弘化二年生れ、官僚）、



誘掖会の事務室には本多博士(右から2番目)をはじめ歴代会長の写真が並ぶ

④高田早苗(万延元年生れ、文部大臣)、
 ⑤竹井澹如(天保十年生れ、県会議長)、
 ⑥竹井耕一郎、
 ⑦長島隆二(明治十一年生れ、衆議院議員)、
 ⑧根岸武香(天保十年生れ、貴族院議員)、
 ⑨福田又一(元治元年生れ、衆議院議員)、
 ⑩佐野延勝(嘉永二年生れ、陸軍軍人)、
 ⑪諸井恒平(文久二年生れ、実業家)

委員会では精力的に調査会を開き、「県下学生誘掖提擲(はげます)の事業は一日も看過すべからざる」の結論を出し、同年三月、「埼玉学生誘掖会設立要旨」を発表しました。また、埼玉学友会では、同年十二月に評議員会を開き、学友会は従前どおり独立したものとし、誘掖事業は新計画の「埼玉学生誘掖会」に委ねることを決定しました。

■ 埼玉学生誘掖会設立要旨(資料)

国運の隆昌民業の発達は、これを人材の養成に望むべくして、人材の養成はこれを教育の宜しきを得るに望むべし。而して教育の宜しきを得るは、先輩有力の誘掖(みちびき)助けること提擲(はげます)に依らざるべからず。これ古今内外の実例に徴して明らかなる所なり。

我が埼玉県は帝都に接壤し、山河形勝(地勢や風景が優れていること)を占め、耕織の生産に富み、古来文武の士に乏しからざるを以て、今日教育のごときも必ず他県に優るべきを推知すべくして、かえって遜色あるものは、これ又故なきにあらざるなり。封建の時、政治の区域犬牙交錯して、互いに溝渠を設け、先進の後進を導き、後進の先進に倚るもの、またその区域に止まり、習慣の久しき、その俗容易に革まらず。置県三十余年の今日に至り、未だ闔県(県じゅう全部)一団の挙に出づるものあらざりき。これを以て県内の学生超群俊秀を除くの外は、或いは方向に迷い、或いは目的を誤り、人生発達の時機を失ふもの尠しとせず。或いは笈を帝都に負ひ、螢雪の初志を鎔鑠して学資を逸予に蕩尽するもの、或いは貧家の子弟進むに学資なく退くに生計なく、空しく志を抱きて恨みを窮途に呑むもの、また尠しとせず。真に慨嘆に堪えざる所なり。ああ均しく教育普及の盛世に生るるもの、知愚強弱は暫く措いて論せず。その就学の得失成材の優劣に至ては、これを自然に

放任すべからず。宜しく人為を以て育養の助を与え、国家に献ずるの大義を明らかにすべし。これよりか同感者協議して、我県学生の為に東京修学の監督法を設け、厳正の規則に依つて、その進退を保護し、方向に迷うものを指導して、その目的を達せしめ、有志の学費に乏しきものは、貸費の恩例を設けて、その志を貫徹せしめ、資あつて行ひなきものは、これを訓戒して、その品行を修治せしめ、これを要するに、内には我が県教育の根本を涵養して人材発達之源を深くし、外にしては闔県共同の美風を造成して大いに徳義を重んじ、以て国運の隆昌を裨補(おぎなう)せんと欲す。その規程節目はこれを別冊に詳らかにす。こいねがわくは県内同感の諸君、この挙を賛成し、その分を論せずその意に任せて義捐(寄附)せられ、腋を集め裘(かわごろも)を成し、県内幾多の年少をして、各々能事を尽さしめんことを。謹て啓す。

明治三十四年辛丑三月

(大正三年十月「埼玉学生誘掖会十年史」より、傍点筆者、原文は漢字とカタカナ)

■ 埼玉学生誘掖会の創立

このようにして明治三十五(一九〇二)年三月十五日、上野精養軒において百九名の出席者のもと創立総会が開かれ、満場一致で初代会頭に洪沢栄一が、副会頭に佐野延勝(共に男爵)が選ばれました。次いで四月五日に評議員会が開かれ、本多静六、諸井恒平他七名(計九名)



誘掖会のOBらで構成する舎友会の芳名録にある洪沢栄一、本多静六らの自筆署名

今なお誘掖会の事務室に飾られてある博士の写真



が理事に選任されると同時に、諸井が勤務するところの日本煉瓦製造株式会社内に仮事務所が設置され、寄宿舎建設へ向けての第一歩が踏み出されました。

明治三十六(一九〇三)年三月、現在の埼玉学生誘掖会の建物がある牛込区(現新宿区)市谷砂土原町に四百九十坪の土地を買収。同年六月、寄宿舎規則を制定。翌三十七(一九〇四)年四月十日に牛込区東横町に仮寄宿舎が設けられ、同年四月十七日に寄宿舎の工事(一期工事)が着工されました。工事は順調に進み、同年九月三十日に落成、十月一日に新寄宿舎へ移転し、十月二十六日に理事である本多静六が初代舎監

に就任しました。

その後本多静六は、大正十(一九二二)年に誘掖会会頭に、その後は特別会員、名誉会頭等の名誉職につきながら、誘掖会を見守りました。

● 埼玉学生誘掖会での生活について

昭和三十年代の前半、埼玉学生誘掖会で寮生活を送った長谷川清さん(昭和三十三年度入寮)と保泉欣嗣さん(昭和三十二・三十三年度入寮)に当時の生活の様子や感想等を伺いました。

● 埼玉学生誘掖会は埼玉出身の学生のための寮でしたが、広く知られていた訳ではなく、縁故やつてでその存在を知る程度でした。寮に入るには、①然るべき推薦者からの推薦状、②成績表、③健康診断証、④身元保証人のほか、⑤保護者を入れた面接等の手続きが必要でした。寮に滞在できる期間は、医学生以外は3か年が限度でした。

● 大学出の初任給が一万三千元(月給)程度の時代、通常の下宿代は一畳千〜千五百円が相場でした(四畳半の場合、食費は別で月四千五百円〜六千七百円位)が、誘掖会は一日二食(朝・夕)付で三千円でした。そのため月六千円あれば生活できるほどでした。

● 部屋の一室には洪沢栄一先生と本多静六先生の肖像画が飾ってありました。

● 部屋は四畳半一人部屋が基本でしたが、この他十二畳の三人部屋が二つ、九畳の二人部屋が二つありました。風呂はあるにはありません

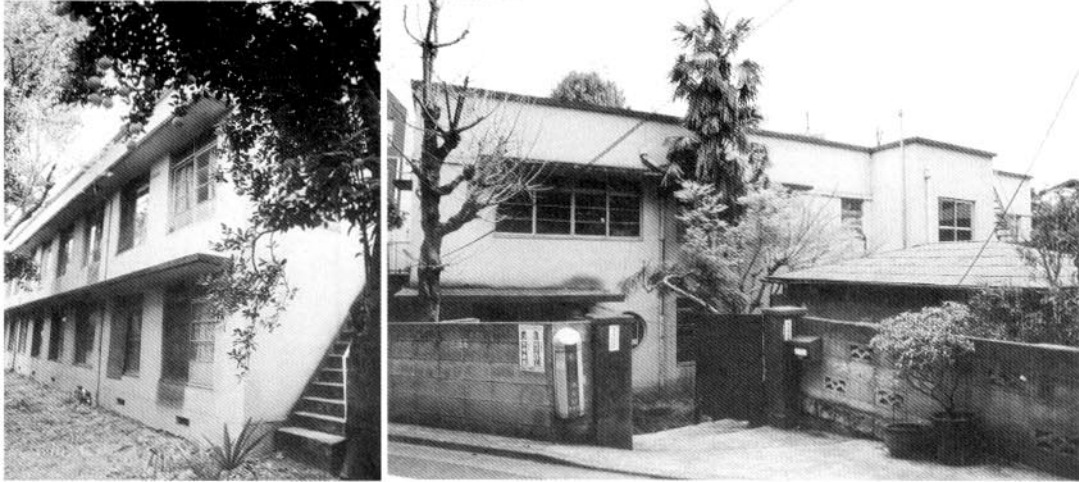
が、めったに使うことはなく、近くの銭湯に行くことが多かったです。門限は午後十一時でしたが、全体的にそれほど厳しい制限があったという感じではなく、ゆるやかな制限の中の団体生活でした。

● 寮の運営は、自治寮であったため、互選により選ばれた寮長、副寮長が寮の責任者となりました。この他に舎監や賄い人(二人)がいました。舎監には埼玉県人会から推薦された埼玉銀行のOBの方が就くことが多かったようです。● 毎年一回、先輩を呼んで「講話」をしてもらいました。

● はっきりした人数は分かりませんが、これまでに二千〜五千人数の人がこの寮を利用したのではないのでしょうか。結び付きとしては、タテの関係は弱く、ヨコの関係が強いといえます。タテの関係では「舎友会」というのがありますが、あまり積極的な活動はしていません。ただし役員会は毎年行っています。

● 在寮生は現在十七名とやや減少傾向にあり、建物の老朽化もあって、誘掖会の財政は逼迫状態にあります。寮の存続を願ひ、寮を立て直すという話もありますが、資金的な問題もあって、なかなか難しい状況にあります。

● 寮生の減少の原因としては、①交通が便利になったために、県内の多くの地域で都内まで通えるようになったこと。②経済的に豊かなになり、生活が贅沢になったこと(ワンルームマンション等)、③個人主義的傾向が強くなり、



埼玉学生誘掖会（学生寮）全景、㉔は正面玄関から、㉕は建物南側より各室をのぞんだ風景

プライベート意識が強まったこと、などがあるようです。

●寮生活を体験して印象に残っていることは何ですか。

① 同じ悩みをもった、同じような遊びができる、同じ世代の、いろいろな大学の人の出会えたことは今でも大きな財産です。

② 経済的なレベルが同じであったため、話がしやすかったことです。

③ 恋愛、家族、就職のことなどについて、朝まで話し合った体験は、他の何物にも代えられない大切なものでした。お互いに話し合っている内に、別の自分を見つけることができました。

④ 強い仲間意識があったため、一人だけ落ち込んだり、ドロップアウトするようなことはなく、まさに人生相談の場となりました。

⑤ 仲間との語り合いにより、自分自身の挫折や悩みから抜け出すことができたため、互助の精神や忍耐強さが備わったようです。

⑥ 六十数年間の人生の中でも非常に重みのある時、経験でした。卒業後も、いろいろな分野で活躍する人が多く、ナマの情報を知りやすく聞くことが出来、人生の幅が広がったように思えます。

⑦ 他の人の部屋の電気が夜遅くまで付いていると、自分も刺激されて、勉強するようになりました。

⑧ 自分の通っている学校の枠にとどまらず、いろいろな専門について学際的な知識が得られま

した。

⑨ 二十歳前後いう、人生において一番多感な大切な時に、それ以上若くても、年を取ってもだめな時に、貴重な共同生活ができたという点で誘掖会の存在価値は大きかったと思います。

■ 岐路に立つ埼玉学生誘掖会

埼玉学生誘掖会の学生寮は築後六十数年が経過し、建物の老朽が進み、安全・衛生・保健等の面において猶予できない状態にあるといえます。さらに財政面においても厳しさが増しており、容易に建て替える状態になく、今後、どのように誘掖会を存続させていくか重要な局面を迎えているということです。

そういつた中であって、在寮生、OBには存続を希望する意見が多くあるといえます。その理由として「かつて、東京で修学する県北、主として熊谷中、不動岡中、本庄中などの出身者が入寮していた。今日、交通機関の発達により、ほとんど通学が可能になってその意味での意義は失われたものの、通学時間が多くかかること、交通費の負担、部活・アルバイト等のための必要な時間の確保などのためにも、入寮の意義は充分にある。また、若者の親元からの独立の志向はいつの時代も変わらず、更にいろんな大学の学生と友人になれることなどの多くのメリットがある。そしてなによりも渋沢翁をはじめ、埼玉県出身の立派な先輩方が目指し育った由緒ある伝統の継承は必要ではないかと考える（一

九八八年十一月六日・「財団法人埼玉誘掖会について(メモ)より」とあります。

終わりに、本多静六博士の「埼玉学生誘掖会創立十周年の祝典に対する所感」(大正三年十月「埼玉学生誘掖会十年史」より)をご紹介します。本稿を閉じます。

「埼玉学生誘掖会の創設以来、資金の募集、寄宿舎の完成、財団法人の成立等、年と共にその基盤確立し、ここに十周年記念の祝典を挙げるに至る、何の喜びか之に加えん。然れ共静かに思いを廻らせば、本会に於ける今日までの事業は、主としてその目的を達する一の手段に過ぎざるなり。去れば今より宜しく第二第三の鳩検校、百の熊谷直実・畠山重忠を鍛え揚げ、更に進んではエヂソン・マルコニーに勝る大発明家、ワシントン・リンカーンに勝る大政治家、カーネギー・ロックフェラーに勝る大富豪家等、あらゆる方面に向て世界的の大人物を養成し、雄大なる武蔵野をして益々その光輝を發揮せしめ、延て大いに世界の文化に貢献する所なかるべからず。(中略)獅子は兎を搏つにも尚その全力を注ぐ、故に長く百獸の王たり。即ち吾人は常に快活を以て事に当り、事は細大となく全力を傾倒して之を処理し、之を征服し、徐々に天命を待たざるべからず。幸に我舎生諸君は常にこの心を以てその修養に資せらるるあらば、近く本会より幾多の偉人傑士を輩出し、真に本会の目的を達し得べきこと期して待つべきなり。いささか所感を述べて祝辞となす」

「本多静六通信」総目次

― 創刊号から第11号まで ―

- 創刊号(8頁・平成四年十月二十一日刊)
 - 本多博士の情報発信基地として：遠藤淳二
 - 本多静六博士生誕地記念園に胸像を建立
 - 日本最初の林学博士本多静六―その業績と人柄―
 - 博士と生家(河原井・折原家、幸福寺とサイカチの木)
 - 本多静六博士を偲ぶ(一)：島田得一
 - 三箇小学校でお会いした本多博士：細田嘉
 - 博士の初の洋行日誌を発見
 - 本多博士と大滝村(県有林と東大演習林)
 - お礼のことは：東京大学名誉教授 東京工芸大学学長 嫡孫 本多健一
- 第2号(8頁・平成五年一月十五日刊)
 - 秩父セメント創業者諸井翁と本多博士
 - 努力と愛の人本多静六：三浦道義
 - 六年生の「小さな旅」：伊藤伸一
 - 博士の手掛けた公園(一) 金沢・卯辰山公園
 - 本多静六博士を偲ぶ(二)：島田得一
 - 博士とうどん・そば
 - 胸像除幕式・偲ぶ会を振り返って：井上清
 - 本多博士胸像の制作を終えて：荻野敏雄
 - 洋行日誌解説(前)
 - 博士のはなし(一)・生誕地での座談会から
- 第3号(8頁・平成五年十二月二十五日刊)
 - 本多博士と鉄道防雪林(青森県野辺地防雪林百周年を記念して)
 - 再び訪れたドイツ・ターラント：伊藤伸一
 - 洋行日誌解説(後)
 - 祖父の思い出：河内幸子
 - 博士の手掛けた公園(二) 埼玉県大宮公園：埼玉県造園業協会 関根貞次
 - 本多静六博士を偲ぶ(三)：島田得一
 - 秩父大滝村に21世紀の森を整備
 - 博士のはなし(二)・生誕地での座談会から
- 第4号(8頁・平成六年三月一日刊)
 - 資料から見た青年期の本多博士―日本最初の林学博士はこうして生まれた―：渋谷克美
 - (一) 誕生からドイツ留学まで
 - (二) 林学者としての活躍
 - (三) 本多の人生観
 - (四) 東京山林学校時代
 - (五) ドイツ留学への憧れ
 - (六) 待望のドイツ留学と結婚
 - (七) ターラント山林学校での生活
- 第5号(8頁・平成六年十一月七日刊)
 - 県民待望の「彩の国ふれあいの森」がオープン：埼玉県林務課長 小池勉男
 - 本多静六先生追想記(一)・直弟子から見た偉人像：東京大学名誉教授 嶺 一三
 - 博士の手掛けた公園(三) 釧路・春採公園(一)
 - 日比谷公園新設当時の思い出：林学博士ドクトル 本多静六
 - 本多博士と大分県湯布院町

- 東京大学所蔵・本多博士関係文献について
- 第6号(8頁・平成七年十一月十五日刊)
- 本多静六博士の手帳：埼玉県農政課長三浦進
- 本多静六先生追想記(二)・直弟子から見た偉人像：東京大学名誉教授 嶺 一三
- 博士の手掛けた公園(三) 釧路・春採公園(二)
- 本多博士、新潟県笹村村杉温泉の発展策を論じる：渋谷克美
- 青森県野辺地町・日本最古の鉄道防雪林でジャズコンサート：野辺地町教委 古田力也
- 第7号(12頁・平成八年一月十五日刊)
- 本多静六先生追想記(三)・直弟子から見た偉人像：東京大学名誉教授 嶺 一三
- ドイツ松の発芽に掛ける夢：伊藤伸一
- 全国各地の公園設計と本多静六：渋谷克美
- 第8号(12頁・平成八年十二月一日刊)
- 讚・本多静六博士：日本画家 関根将雄
- 本多静六先生の思い出：佐藤まつ子
- 愛弟子二人による特別対談・本多静六先生の思い出：嶺 一三、相川行雄
- 本多博士の公園設計・福岡県宮大濠公園の設計を中心に：渋谷克美
- 歴遊の儒学者・菊池菊城：渋谷克美
- 第9号(12頁・平成九年十二月二十四日刊)
- 日本の公園の父、本多博士設計の公園等を記念碑に
- 豪雪との闘い「野辺地防雪原林」：JR東日本 柳谷正勝
- 本多博士の揮毫による記念碑三基を確認
- 本多博士の公園設計「北海道大沼公園」
- 鹿児島県・蒲生の大クスと本多博士―蒲生町長が語る本多博士のこと―
- 水戸偕楽園と本多博士
- 第10号・特別号(61頁・平成十年五月二十六日刊)
- ターラントに於ける本多静六―コロキウム「日独科学交流の伝統から」：東京農工大学 名誉教授 阪上信次
- 明治二十三年洋行日誌(口語訳)
- 洋行日誌の内学位試験及び学位授与式の景況(明治二十五年)
- 本多静六博士の業績
- 本多博士設計による全国各地の代表的な公園
- 公園設計の特色：渋谷克美
- 本多博士の手がけた全国の公園等一覧
- 明治神宮と本多博士：小山千秋
- 第11号(20頁・平成十一年五月十六日刊)
- 本多静六と清澄演習林―演習林創設の頃―
：お茶の水女子大学名誉教授・聖学院大学教授 遠山 益
- 本多博士の奨学金と貴い教訓の数々：埼玉県樹木医学会長 横川登代司
- 垣間見る偉人：小山千秋
- 日本の公園の父・本多博士―愛知・岐阜両県下の事例を中心に―：渋谷克美
- 埼玉学生誘掖会と本多博士：渋谷克美
- 「本多静六通信」総目次(創刊号〜第11号)

編集後記

通信の反響は、編集に携わる私たちにとって何よりの励みであります。今回は、遠山益・横川登代司両氏を始め、埼玉学生誘掖会の取材に当たり北川宏之・長谷川清・保泉欣嗣の各氏に大変お世話になりました。心からお礼申し上げます▼偉業も百年の時間と共に風化され、昔話になって行く中、博士自ら手掛けられた森や林の茂みは、見る人に、汗と血肉の労働をも実感させてくれます▼公園等は、地元の人々の記憶も薄らぎ、図書館に残る当時の新聞記事と、大から提供された博士の記録を通分して見れば、それぞれ時代により改造されながら、本多百年の計が実り、町おこし、文化の振興に寄与していることを、取材した渋谷が記述しています。こうした取材を通して、博士の業績が林学・造園学に限らず、領域のないことが解って参りました▼町では生涯学習文化センター内に、(仮称)「本多静六記念室」を設置して、博士の遺品や写真、著書、書類等の展示を通して、博士の業績を分かりやすく紹介することを検討しています。つきましては読者の皆様からも、ご提供頂ける資料等がございましたら、是非左記までご一報くださるようお願い申し上げます。

【編集発行】 本多静六博士を記念する会

〒34610192 埼玉県菑浦町新堀38番地

菑浦町役場 企画財務課内

○四八〇(八五)一一一(代表) 内線二三五